

日本語学習者の発音能力に関する 一考察

福井 貴代美

キーワード

聞き取り力・自己モニター力・発音基準・発音向上意欲・発音学習方略

1. はじめに

第二言語習得において、音声の問題は、母語の影響がもつとも現れやすい分野であると言われる。しかし、最近の研究動向としては、母語の影響だけでなく、中間言語の問題が多く取り上げられるようになってきた。戸田(2001)には、日本語学習者の音声は「正の母語転移」、「負の母語転移」、「過剰般化」、「近似化」などのプロセスを経て、目標言語の音韻体系に近づいていくとの報告が記されている。では、第二言語音声の習得過程において、同じ言語を母語としていても、「発音のいい学習者・よくない学習者」という個人差が現れるのは、具体的にどのような要因によるものなのだろうか。本稿では、実験的に実施した韻律指導と発音および聞き取りテストの結果、さらには、アンケート及び、インタビュー調査の結果を通して、日本語学習者の発音能力を支える要因を探る。

2. 調査目的

本調査の目的は、学習者の発音能力を支える要因を次の3点から確かめることである。1つ目に、発音テストと聞き取りテストの結果から、聞き取り能力との関係を示す。2つ目には、自らの録音テープとモデルテープを聞き比べての自己評価の課題から、自己モニター力との関係を探る。3つ目には、アンケートやインタビュー調査の結果から学習者の学習意識や学習方略との関係をみていく。

第一に、発音の能力と聞き取りの能力には、切り離せない何らかの関係性があると考えられる。音を識別する能力と発音仕分ける能力の相関については、岡崎他編(1992)に、日本人大学生を対象とした英語の「l」と「r」の識別と発音に関して、有意な相関関係が見られたという報告がある。ただし、こうした単音の識別と発音においては、識別できなくても、口の形や息の量などを教えてもらったりすることで、発音は可能であると推測される。しかし、本稿での調査対象であるアクセントに関しては、ピッチの下降を聞いて捉えることができなければ、その再現は難しいと言えるだろう。方法を説明すると言っても、ピッチの下降位置を示すことになるので、それを発音に結びつけるためにはやはり、

音の下がり目を聞き分ける意識が必要だろう。単にモデルを聞いてその場でリピートすることは可能だろうが、それではアクセントやイントネーションを習得したことにはならない。いずれにしろ、単音の問題に比べてアクセントやイントネーションの問題の方が、聞き取り能力との相関性が高いのではないかと予想される。

小河原 (1997a) では、「聞き取り」能力を「単音・アクセント・イントネーション・プロミネンス」の4つの音声要素について測定し、「発音」との相関を調査した結果を報告している^{注1}。それによると、単音では、どれも「発音」との相関はみられなかったとしている^{注2}が、アクセントやイントネーション・プロミネンスにおいては、「自己再認」と「発音」に限っては、優位な相関がみられたとしている。さらに、各音声要素における発音基準を意識してもち、自分自身の発音について自己再認できている学習者ほど発音もできていると報告されている。したがって、「聞き取りができれば発音もできる」という場合の「聞き取り」とは「自己再認」、つまり「自分自身の発音の聞き取り」ができる場合であるということになる。本調査で行った聞き取りテストは、この「自己再認」によるものではなく、あくまでも、複合語や句を聞いて、そのアクセントの位置を答えるという、いわば「再認」ということになろうか。しかし、「音の高低」という基準をどの程度明確にもっているかが、実際の発音に大きく関わってくるものであることを考えると、その有効な基準をどの程度もっているかということと、発音能力には何らかの関係性があると考えてよいだろう。本調査におけるテストでは、複合語や句のアクセントに関する知識の有無にも左右される点があるだろうが、ここでの「聞き取りテスト」と「発音テスト」の結果が、まったく関係性を示さないということはないと考えられる。何らかの傾向は示されるはずである。

第二に、発音の能力と自己モニター力との関係も重要であると考えられる。小河原 (1997ab) では、発音の比較的よい学習者は、有効な聞き取りの基準とともに、妥当な発音基準を明確にもって発音し、その基準どおりに発音できているかを聞き取ることができるとしている。さらに、自分の発音を自己評価しながら、積極的にクラスや教師を活用し、自主的に発音練習を行っている傾向が見られたとし、自己評価意識が学習者の発音能力に影響しているという考えが示されている。ただし、自己評価をする際には、正しい基準をもって評価しなければ、正しい発音には結びつかない。これらから、発音の力には、有効な聞き取りの基準を明確にもち、発音においても、妥当な発音基準をもった上で発音し、さらに、その基準をもとに自らの発音がうまくできているかどうか検討し、自己評価できる力が、重要な要素として関わっているものと考えられる。さらに、学習者の意識の問題も重要であることがわかる。こうした点を調査協力者の自らの発音に対する自己評価の分析から、確かめたい。

第三に、学習意識や学習方略などとの関係である。自己モニター力が発音能力の重要な支えとなるが、その自己モニター力を高めるためには、学習者の発音学習に対する意欲や意識の高さが不可欠であると考えられる。佐藤 (2001) に、「自己モニター」の困難さについて触れられており、発音改善意識が高い学習者には向くが、そうでない学習者には難しいとの記述がある。この自己モニターの方法に限らず、学習者の発音学習に対する意欲と発音の力にも関係性があると予想される。また、発音学習に対する動機も発音能力に結びつく要因の一つであると言えるだろう。小河原 (1998) の海外における調査では、「コミュニケーション意欲」が学習動機としての第1因子で、それが「自己モニター型」のストラ

テジー使用を促すことが示唆されたとの報告がある。しかし、本調査における協力者は、全員が大学院で日本語教育を学んでいる学習者であり、日本滞在歴も長い。したがって、日本人とのコミュニケーションは日々、何不自由なく行われており、専門分野から考えて当然、学習意欲の高さは備えていると言える。よって学習動機も、さらなる「発音向上意欲」といったあたりが予測される場所である。また、小河原(1997ab, 1998)にあるように、発音がよいと言われる学習者は正しい発音基準を明確にもって発音すると言われる。その発音基準を得るためには、まずは聞き分けができなければならない。学習者が音の高低を聞き分け、日本語のアクセントを捉える有効なストラテジーを有しているか否かも、重要な要素であると考えられるだろう。最後に、発音がいいと言われる学習者が行っている発音学習や練習方法などから、発音能力との関係性も見られるのではないかと考える。アンケート・インタビュー調査から、これらを検証したい。

3. 調査協力者

まず、指導対象の協力者は、[表 1]の a~g の 7 名である(以下グループ A と呼ぶ)。日本語レベルは初級後半から、中級前半で、早稲田大学別科において、発音クラスの受講経験がある者である。次に、指導対象者以外に、発音・聞き取りの力を計る比較対象として、上級レベルの 5 名の学習者にもテストを実施した。[表 2]に(あ)~(お)で示す(以下グループ B と呼ぶ)。5 名は、すべて日本語教育を専門とする大学院生であり、日本語のレベルは上級以上である。最後に、発音テストを得点化し、客観的にその結果を示すため、評価者として[表 3]の A~F の 6 名の日本語教師に協力を依頼した^{注 3)}。6 名の性別は、すべて女性である。年代と日本語教育歴を表に示す。

[表 1] 指導対象協力者(グループ A)

a	台湾語(台湾)・女・23歳	b	英語(イギリス)・男・25歳
c	ポルトガル語(ブラジル)・男・25歳	d	ドイツ語(ドイツ)・男・28歳
e	中国語(中国)・男・25歳	f	広東語(香港)・女・22歳
g	広東語(香港)・女・24歳		

[表 2] 上級レベル協力者(グループ B)

あ	中国語(中国・上海)・女・24歳	い	中国語(中国・西安)・女・27歳
う	中国語(中国・北京)・男・30歳	え	韓国語(韓国・ソウル)・女・33歳
お	韓国語(韓国・釜山)・女・30歳		

[表 3] 発音テスト評価協力者

A	40代	民間の教育機関で16年(クラス授業)	E	30代	民間の教育機関で8年半と韓国の大学で1年半(クラス授業)
B	30代	民間の教育機関で16年(クラス授業)			
C	40代	民間の教育機関で14年(クラス授業)	F	30代	民間の教育機関で5年(クラス授業)と個人指導を3年
D	40代	民間の教育機関で13年(クラス授業)			

4. 調査概要

4. 1. 指導

調査にあたって、グループAに対して、4日間の短期集中指導を行った。指導の範囲は句を構成する語のアクセント型に関わる問題(句のアクセント)と複合名詞のアクセントの問題を中心とし、それらを含む文のヤマ^{注4}を捉えることを目的とした。指導にあたっては、音声的知識の導入、韻律の視覚化、自己モニターの促進の3点をポイントとし、毎回はじめに、文のヤマの数や、アクセント・拍の問題に関する聞き取り練習も行った。音声的知識の導入には、田中ほか(1999)をもとに資料を作成した。そのほか、韻律の視覚化には、河野ほか(2004)のプロソディーグラフ^{注5}を使用した。最後に自己モニターの促進には、自己評価シートの記入という3回の課題を与えた。課題は、毎回指定された練習文をあらかじめ与えられたモデルテープを聞きながら練習し、その後で、自分の音声を録音し、その録音テープとモデルテープを聞き比べて、違いを具体的に記述するというものである。この課題の自己評価シートを採点し、学習者の発音能力を支える要因の1つとして、自己モニター力との関係という観点から考察を行う。

4. 2. テスト

学習者の発音能力に関する考察を行うにあたって、聞き取り力と発音の力の関係を分析する必要がある。そこで聞き取りテストと発音テストの2つのテストを行った。その際、グループAについては、指導の効果を計る意味もあり、指導前後の2回テストを行ったが、本稿における考察対象としては、指導後のテスト結果のみを取り上げる。なお、グループBに対しては1回のテストを行った。

聞き取りテストは、指導内容に合わせ、複合名詞のアクセントと句のアクセントを聞きとるものである。問題は複合語と句を合わせて全部で50問とし、それを2倍してパーセンテージ(%)で、正答率を示すこととした。

発音テストは、指導範囲から、限定関係にある「名詞+名詞」「形容詞+名詞」「名詞+動詞」などを含む文や、複合名詞を含む文のヤマを意識した発音について確かめるものである。構成は、短文:9、文章:1(約120字)である。具体的なテスト文を後ろに[資料]として付す。なお、1名ずつ録音機(SONY TCM-5000EV)を用いて、テープに録音した。

4. 3. 発音テストの評価

発音テストの評価対象となった音声ファイルは、全部で190である。その内訳は、グループAは140(7人の指導前後の音声が各10問題文)、グループBは50(5人の音声が各10問題文)である。評価にあたっては、1つの問題文ごとに19の音声をランダムに編集し、10問題文で合計190の音声ファイルを含むテープを作成した。それを評価シートとともに評価者に送り、評価を依頼した。

評価基準については、「日本語としての韻律の自然さ」という観点から5段階の評価をしてもらった。また、「自然さ・不自然さ」といっても、その原因はさまざまである。そこで、5段階評価のほかに、コメントも記述してもらった方法をとった。評価結果については、6

名の評価者から戻ってきた評価シートの数値を集計し、5段階評価×6人＝各30点満点で、10個のテスト文ごとに得点化し、10問の合計300点満点で示す。ここでは、グループAについては指導後のテスト結果のみを考察対象としている。

4. 4. アンケート及びインタビュー調査

まず、グループAに対しては、学習意欲や学習方法に関する傾向を確かめるため、指導前のアンケート調査において、「自身の発音に関して、問題だと思う点、発音に関してとくに勉強したい点」などについて記述してもらった。加えて、日本語の発音を学ぶ上での意識や発音学習の方法について、選択式の質問に答えてもらう方法をとった。次に、グループBに対しては、インタビューにおいて、その学習スタイル（ストラテジーについても含む）や学習動機を確かめた。また、アンケート用紙により、「自身の発音に関する問題点と気をつけていること」、「発音に関する意識」について尋ねた。

5. 調査結果と考察

5. 1. 聞き取り能力と発音能力の関係

「聞き取りテスト」と「発音テスト」の結果から、学習者の聞き取りの能力と発音の能力に見られる関係と、その傾向を確かめるにあたって、[表4]にグループA・B12名の「聞き取りテスト」と「発音テスト」の結果から得られた総合順位を示す。グループAについては、どちらも指導後に行ったテスト結果によるものである。

[表4] テスト結果総合順位 (*「a～g」:グループA / 「あ～お」:グループB)

順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
聞き取りテスト	あ	い	e	う	g	f	b	a	c	d	え	お
正答率 (%)	98	96	93	92	77	76	74	63	45	41	33	11
発音テスト	あ	い	う	g	e	f	え	お	a	b	d	c
総得点 (/300)	263	256	237	226	225	211	199	197	192	168	147	131

この2つのテスト結果を振り返ってみると、まず6名ずつの上位グループと下位グループの2つに大きくメンバー構成が分かれていることが見てとれる。聞き取りテストで6位までに入っているものは、発音テストでも6位までに入っており、上位グループについては、聞き取りテストと発音テストの成績順位は、ほぼ一致していると言ってよい^{注6}。つまり、聞き取りテストで高い正答率を得ているということは、音の高低を判断するための有効な基準をもっており、再生の際にも、その基準をもとに意識化がなされるものと考えられる。よって、やはり聞き取り能力と発音能力は、何らかの関係の上に成り立っていると考えられそうである。

では、下位グループを見てみよう。まず、目につくのが上級者(え)(お)の順位である。聞き取りテストにおいては、最下位にあるが、発音テストにおいては、下位グループの中では、最も上に位置している。この2名は、どちらも韓国語母語話者であり、これまでの

学習環境においても、アクセントに関する意識がやや薄いという特徴が見られた。したがって、聞き取りテストにおいては、ピッチの下降位置を捉えることが困難であり、このような結果となって表れたものと思われる。発音テストの評価でも、この2名についてはアクセントに関する問題点の指摘が多かった。しかしながら、発音テストで、7、8位の位置につけているのは、流暢さに支えられての結果であると言える。次に、下位グループの中で特徴的なのが、bの聞き取りテストの好結果である。導入された複合語や句のアクセント規則に関する知識を確かなものとするための努力をした成果によるところが大きいと言えるだろう。このような知識をもち、それを手がかりに聞くことを重ねていくうちに、少しずつ高低をつかむ基準ができ、聞き取り力は徐々に向上していくものではないかと思われる。しかし、実際に音の高低を判断する有効な基準ができていない段階では、なかなか発音能力には結びついていかないのだろう。bの場合も、強弱アクセントをもつ母語の影響も大きく、まだまだ有効と言える聞き取りの基準ができるところまでは至っていなかったと考えられる。下位グループ全体から見られる傾向としては、やはり聞き取りテストの正答率の低いものは、発音テストの評価も低くなっていると言える^{注7)}。つまり、聞き取りにおいて、有効な判断基準ができていない学習者にとっては、発音に際しても、その基準をもとに意識化がなされることで、高い評価につながるが、基準ができていない段階では、明確な意識化がなされず、発音能力には結びつかないと言ってよいだろう。しかし、アクセントの聞き取りができず、発音において、正しいアクセントの生成がなされていなくても、適度なスピード感による流暢さは、韻律としての自然さから判断した場合、アクセントの不自然さを補うものとなることは(え)と(お)の結果からわかる。

2つのテスト結果をもとに行った考察を振り返って、アクセントの聞き取りと発音には、「聞き取りの際の基準とそれを意識した発音」という観点から、関連性があると考えてよさそうである。しかし、語のレベルでのアクセントに関しての聞き取りや再生に問題があっても、文のレベルでの再生となると、全体としてのまとまり感や、流暢さが評価され、結果として「不自然な発音だ」という評価にはつながりにくいことも確かであるようだ。

5. 2. 自己モニター力との関係

ここでは、グループAに対して、指導時に課した宿題と発音テストの結果から、学習者の発音に対する自己評価力と発音の能力の関係についての分析・考察を試みる。さらに、グループBに関しては、発音テストのフィードバックの際の反応をもとに分析を行う。

では、グループAに対する課題の自己評価シートとの関係からみていく。なお、課題提出の翌日、シートに表れていない自己再認度を確かめるため、課題の内容について、時間が許す限り、学習者の宿題テープを聞きながら、個別に確認を行った。その際の協力者の反応も含めて、「自己評価」という課題に対する評価を主観的ではあるが、3回の提出課題を総合して、A～Dの4段階で判定した。これは主に自分の発音に対する指摘がどの程度できているかによる判定である。よって、再生した文の良し悪しは問わない。A～Dの基準は、A：80%以上、B：70～80%程度、C：60～70%程度、D：60%以下とした。

では、7名の課題に関する評価を[表5]に示す。「参考」として、聞き取りテストの正答率(%)、発音テストの得点(/300点)とともに、それぞれの7名中の順位も示す。

[表5] 課題の評価

協力者(グループA)	a	b	c	d	e	f	g
課題に対する評価	B-	B+	D	C	A	A	A
聞き取りテスト (%)	63	74	45	33	93	76	77
順位	5位	4位	6位	7位	1位	3位	2位
発音テスト (/300点)	192	168	131	147	225	211	226
順位	4位	5位	7位	6位	2位	3位	1位

ここでは自身の発音の問題点をどの程度まで認識できているかという自己評価と、テスト結果の関係を見てみる。傾向として、e, g, fという発音・聞き取りのテストでも好成績を得ている3名は、自身の発音とモデル発音との違いをよく捉えることができている。それに対して、成績が下位であったc, dは、自分の発音上の問題点にあまり気づくことができていない。とくにcは、シートに具体的な記述がほとんど見られなかった。a, bは、上位の3名に比べると、気づくことができていないところが少し多く見られ、的確ではない点もある。しかし、上位者に比べて、もともとの発音の問題点が多いことも、すべてを指摘しきれない原因であろうと考えられる。その中でbは、モデルテープと自分のアクセントの違いを具体的に記述して示すことができている。アクセントを聞くことに対して、自分なりの基準ができ始めていると考えてよいだろう。聞き取りテストにおける好成績もうなずける点である。しかし、自らの問題点に気づき、どのように違うのかに気づいても、即座に自分の発音を正すことは難しいということであろう。とくにbにとっては、強勢拍リズムの影響もあり、日本語のアクセントのような高低をつかむ発音上の基準を作り出すのに時間がかかるのは当然であろうと思われる。しかし、音声指導を継続して受け、自らも自身の発音を評価するという発音学習を積極的に行うことで、発音における基準も少しずつできてくるのではないかと考えるところだ。

こうした自己モニターを促す音声指導の試みが少しずつなされてきているようである。佐藤(2001)には、実際に「自己モニター」を活用した「音声指導授業の試み」の報告がある。それによると、この音声指導は、能動的な活動であり、学習者に発音改善への意識化を図りやすい。この指導によって改善意識をもった学習者は、自ら努力して改善するようになる。学習者自身に自分の問題点を把握させるために有効な方法であると述べられている。一方、「自己モニター」の困難さについても触れられている。本調査の指導においても、意識の高い学習者ほど、積極的に取り組み、効果を上げたと言えるが、意識の低い学習者にとっては、あまり積極的になれなかったような印象を受けた。

ここでは、自己評価という課題に対する教師側の評価から、学習者の自己モニター力と、発音能力の関係を見てきた。学習者の発音学習に対する意欲や、自らの発音に対する意識の高さの問題も大きい。自分の発音を評価する力、そしてそれを自己修正していく力、言わば「自己モニター力」と「発音能力」には関係性があることが見えてきた。小河原・河野(2001)では、「自己モニター」について、次の3つの段階から構成されるものとしている。<①学習者が自分の発音上の問題点に気づく・認識する,②妥当な発音基準を模索し、自ら作り出す,③その基準にもとづいて適切に自己評価しながら、自己修正する>この3つの段階が進んでいるほど発音能力も高いと言える。ここでは、アクセントを中心

とした韻律面に着目した発音力をみてきたわけだが、やはり、自己モニター力が高いと判断される学習者ほど、自然な発音ができるという傾向が見られた。

このような傾向は、グループBに対して行った「発音テスト」のフィードバックの際にも感じられた。グループBに対しては、とくに指導を行ったわけではないが、インタビューの際に、フィードバックをかねて、簡単に自身のテストについて振り返ってもらった。問題が感じられるものに関して、まず一題ずつ、録音した「発音テスト」のテープを聞いてもらい、筆者がモデルを示し、その違いがわかるかどうかを確認し、自ら修正してもらうという作業を行った。そこでもやはり、上位グループと下位グループでは差が見られた。

上位グループの3名(あ・い・う)は、モデルと自らが読んだ文の違いについて、すぐに気づくことができ、こちらが指示を出すまでもなく、大方は、自ら修正を行うことができる。中でも(い)は、アクセントの問題に限らず、ヤマの数の問題やスピードなどに関しても指摘をした上で、すぐに修正をするなど、ほぼ完璧に近く自己モニターができていると言える状態であった。(あ)と(う)については、形容詞と尾高型名詞のアクセントに少し戸惑いが見られたが、大きな問題はなく、高い自己モニター力を備えていることがうかがえた。それに対して(え)と(お)の2名は、自己修正という面で、少し劣る点が見られた。モデルと自らの発音の違いに気づくことはできるのだが、すぐに正しい修正ができないといった様子であった。アクセントの間違いなど、聞いてすぐに違うことに気づき、言い直しをするのだが、またアクセントの位置が異なってしまっているという状態で、こちらの反応を見て、もう一度モデルの提示を求めてくるという場面が見られた。これは、アクセント核の位置を捉える基準ができていないためであろうと思われる。前記の「自己モニター」の段階からすると、①の自らの発音の問題点に気づくことはできているが、②の妥当な発音基準を作り出す段階には至っていないようだ。自己モニター力を備えるには、在日期間の長さに関わらず、習慣化がなされることが重要だろう。特にアクセントの問題は、日本語の高低アクセントの感覚に対する意識が薄い学習者にとって、自ら妥当な判断基準を得るためには、時間を要する長期にわたる自己モニターの習慣化が望まれるところだろう。このように上級者の短文を読む際の発音をみても、その評価の高い者は、自己モニター力を備えており、評価の低い者は、まだモニター力が弱いと判断できる。

したがって、グループA、Bのどちらにおいても、学習者の発音の能力と自己モニター力には、関係性が認められると考えてよいだろう。ここでの韻律を中心にみた発音に関しても、自己モニター力の高い学習者の発音は高い評価をされており、アクセントをはじめとした韻律を意識した文の再生において、自己モニター力が発音能力の重要な支えとなっていると判断できよう。

5. 3. 学習意識・学習方略との関係

前節で、自己モニター力が発音能力の重要な支えとなるが、その自己モニター力を高めるためには、学習者の発音学習に対する意欲や意識の高さが不可欠であることがわかった。そこで、本節では、協力者に対するアンケートやインタビュー調査の結果をもとに、学習者の発音能力と学習意識の関係を考察する。さらに、発音のよいと言われる学習者たちが用いている方略や、学習方法などについても検討する。

5. 3. 1. 指導対象者（グループA）へのアンケート調査から

アンケートではまず、自身の発音の問題だと思われる点と、発音に関してどんな勉強をしたいと思っているかについて尋ねた。前者は自分の発音に対する問題点を具体的に記述するところであり、自己評価意識につながるものと考えられる。さらに後者はその意識から生まれる発音学習に対する意欲と考えてもよいだろう。自分の発音の問題点に気づき、それを改善したいという気持ちが、後者の答えとして表れていると判断できる。これによると、発音テストにおける評価の高かった g, e, f や、中位の b などは、自らの問題点を把握しており、それを改善したいという意識もほぼ一致していた。自らの問題点に対する改善意欲も高いことが想像される。a については、問題点に関する認識と勉強したいことが一部一致していた。d は問題点と勉強したいと思うことは異なっており、問題点を認識してはいるが、それに対する改善意識については、今ひとつはつきりしない。しかし、a も d も、発音における問題点を具体的に認識することは、できていると思われる印象であった。それに対して、発音テストの結果が最下位であった c の答えは、「問題だと思っている点」は、「ない」となっており、発音に関して勉強したいことについては、「音楽」と答えていた。これらからは、自己の発音に対する問題意識をまったく持っていないことがうかがえる。さらに、発音学習に対する意識も曖昧で具体性がない。

この2つの質問の結果から言えることは、自分の発音に対する問題点をしっかり把握しており、それを改善したいという意識を持っている学習者ほど、発音テストにおける評価は高い傾向にあるということである。一方、自らの発音に対する問題意識がなく、発音学習に対する目的が曖昧な学習者の発音テストにおける評価は低いものとなっている。

次に選択式の質問では、I「日本語の発音学習に対する考え」とII「発音をどのように練習しているか」を尋ねた。ここでは紙面の都合で、その回答から得られた大まかな傾向を述べるにとどめる。Iでは、発音学習に対しての動機を確かめることができた。全員が「できるだけ自然な発音で話せるようになりたい」という意識はもっているものの、発音テストの成績が下位の者は、具体的に自分と他者の発音を比較したり、自分の発音を意識したりすることはないという状態で、自己評価意識も低く、発音学習に対する目的意識がまだ曖昧であると判断された。具体的な目標の提示ができないという面から考えると、発音学習に対する動機付けはそれほど高いとは言えないであろう。ここから発音学習に対する動機付けの高さと発音能力の関係も見える。IIは、どのような学習を行っている者が好成績を出しているのか、発音能力との関係についての傾向を見るためのものである。ここで見えてきたことは、グループAは、発音学習においては、まだ主にリピート練習の段階である者が多いということだ。しかし、友達に教えてもらおう、日本人の発音と比べる、自分の発音を録音して聞いてみるなど、少しずつ自らの発音を客観的に評価しようという姿勢が見えている人もいた。c, d を除いた5名には、何らかのそうした傾向が見られた。ただし、発音能力の向上に直接結びつく練習法はまだ持ち得ていないと言えそうである。

5. 3. 2. 上級者（グループB）へのアンケート調査から

上級者へのアンケート調査から、次の2点がわかった。1つは、自身の日本語の発音に関する意識の高さを尋ねた質問についてである。「あまり関心はないほうだ」と答えた人はおらず、それなりに関心をもっていることがわかったが、①「いつも意識しており、かな

り関心を持っているほうだ(あ・い・う)」と②「人並みに意識しており、まあまあ関心がある(え・お)」に関心の高さが分かれたのは、国での音声指導のあり方の違いが表れているということであろう。(あ)(い)(う)が中国語母語話者で、発音・聞き取りのテストにおいて上位に位置した3名であり、(え)(お)は、韓国語母語話者でテスト結果が下位であった2名である。2つめは、自身の発音の問題点に関してである。全体的にアクセントやイントネーションといった問題に意識が向けられている傾向があり、発音の問題を指摘されることについては、みな抵抗はないと答えていることから、国による差はあるものの、自らの発音をよりよくしたいという意識が高いことがうかがえた。

5. 3. 3. 上級者(グループB)へのインタビュー調査から

グループBへのインタビューからは、発音学習に対する動機と、アクセントを捉えるストラテジー、発音学習方法などの問題を中心にあげられる。

5. 3. 3. 1. 学習動機

先にも記したが、グループBの5人の学習動機としては、さらなる「発音向上意欲」といったあたりが中心となるのではないかと予測された。そこで、会話の流れの中で、そういった意識を聞き出すよう努めた。その結果、全員が、これまでの学習体験から「発音の授業や指導の機会がもっとあればよかった」という考えを持っているようであった。また、「発音の習得」に関しても重要だという認識が大勢を占めていた。このような協力者であるので、その学習動機はおそらく「発音向上意欲」に関わるものだろう。そこで、次のような質問を投げかけてみた。「日本人と同じようになる必要は、(ない)・・・?」と、あえて、最後まではっきり言わずに訊いてみたところ、「日本人と同じようになるのは、無理。」とはっきり言いながらも、「できるだけ近づきたい」という答えと、「できれば同じようになりたい」とはっきり述べる者とがあり、その向上意欲は予想以上であった。中でも、(あ)(い)(う)の3名の答えには、(え)(お)とは異なり、「日本人と同じになる必要はない」といったことは現れず、(い)が、少し遠慮がちに言っていたものの、「できれば日本人のようになりたい」という考えをもっていることがうかがえた。上級者5名の学習動機には強弱の差はあるものの、「発音向上意欲」があると考えてよさそうだが、とくに(あ)(い)(う)の3名の答えからは、非常に強い「発音向上意欲」がうかがわれた。あとは、(お)が言っていた「日本語を教える上で、少しでもいい発音でありたい」という仕事に結びつく動機もあると考えられる。これは、「日本語」という専門分野をもつ特別な人たちの学習動機であるので、もちろん一般化して考えることはできないが、「発音向上意欲」という学習動機は、(あ)(い)(う)の発音や聞き取りのテストの好結果に見られたように、発音能力と無関係ではないだろう。同じ母語で、同じような学習環境を与えられていても生まれる能力の差があるとすれば、こうした学習動機によるものが考えられるだろう。

5. 3. 3. 2. アクセントを捉えるストラテジー

5.1.において、聞き取り能力と発音能力には関係性があることを示したが、学習者が音の高低を聞くにあたって、どのようなストラテジーを使用しているのか、聞き取りテストにおいて、高得点をマークした3名に訊いた。その結果、3名は同様に次のような答え

を述べていた。アクセントの聞き取りの際に、迷ったときには、もう一度、頭の中で言い直してみるというものである。そして、その際1拍ずつ、ゆっくり丁寧に言うことで、下がり目をつかむことができるようである。これは、聞き取りテストの際にも、解答にあたって、テープの音声を自分でリピートしながら答えていた協力者がいたことからわかる。また、1拍ずつ丁寧に言い直してみるという方法を指導の際にもとり入れてみたが、高の拍から低の拍への変り目を捉える上で、非常に有効であった。そういった方略をこの3名の協力者は、すでに無意識のうちに使いこなしているようだ。今回は、中国語話者の回答しか得られなかったが、3人が音の下がり目を判断する上で、有効な手段となり得る共通したストラテジーを有していることがわかった。生成面に関しては、特別に有効なストラテジーを聞き出すことはできなかったが、日本語の高低アクセントを捉えるストラテジーを有していることは、発音上の一つの基準を持つことに結びつくと考えられる。この3名が発音テストにおいても上位に位置し、高得点を得ていたことから、日本語のアクセントを捉えるストラテジーの有無が発音能力と関わっていると見てよいだろう。

5. 3. 3. 3. 発音学習の方法

長期的な学習方略とも言える発音に関する学習方法に関して、グループBを対象に行ったインタビューで出てきた方法は、大きく次のような3つであった。

1つは、皆に共通して行われていたものとして、会話などのテープ教材のリピートやテレビやラジオを視聴して真似てみるなどの方法である。その中で一歩進んでいると考えられたのが、(あ)に見られた教材にアクセントや自分なりのイントネーション符号などを付して練習するという点であった。これは(あ)に明確なアクセントの聞き取り基準ができてから可能なことと言える。また(い)も自らアクセント辞典をひいて、チェックをし、それに基づいた練習を行っている。これもアクセントの聞き取り・発音に関して明確な基準ができてからであると思われる。

2つ目として、モデルを繰り返す練習に続いて、次に重要なのは、自らの音声を客観的に聞いてみることである。そして、モデルと自分の音声の違いから、自らの問題点を意識することである。そのためには、自分の音声を録音する必要がある。こうしたモデル音声との聞き比べを続けることで、自分なりの発音上の基準が作られていくものであると思われる。(あ)(う)においては、いつもではないが、そうした努力をしていることがうかがわれた。発音テストで好成績だった者は、その練習法でも、単なるリピート練習からさらに一歩進んだものとなっていることがわかる。

3つ目には、気軽に自分の音声上の問題点に気づく方法として、日本人との接触場面の活用があげられた。日本語を話す機会を多く持ち、日本人の友達などに指摘してもらうという方法である。これは、日本で学んでいるからこそできる方法であり、有効な手段であろう。ほかにも、スピーチ等を行う機会にその練習を聞いてもらい、指摘してもらうという方法も出された。また、(あ)も言っていたことだが、上級者であるがゆえに、間違っただけで覚えたものが化石化してしまい、自分でも気づかなくなってしまうこともある。したがって、上級者がさらに発音能力を向上させるためには、こうしたアドバイスは重要であると言えるだろう。いずれにしても、発音学習に対する積極的な意欲がなければ、かなわない方法である。ここでは、上級者の発音学習方法についてみてきたわけだが、人によ

り練習の密度に違いはあるが、それぞれ、何らかの方法で発音をよくするための学習を実行している。はっきりした目的をもって、こうした方法を実行することが、能力の向上につながるものと考えられる。

以上、グループBへのインタビュー調査の結果から、発音能力が高いと判断される学習者は、強い「発音向上意欲」という動機をもち、自分なりの学習方法を実践していること、さらに高低アクセントを捉えるストラテジーを心得ており、有効な判断基準をもっていることが示唆された。

6. まとめ

本稿では、学習者の発音能力に関して、母語の影響以外の点に注目し、聞き取り能力との関係、自己モニター能力との関係、学習意識や、学習方略などとの関係から考察を行った。その結果、アクセントの聞き取り能力と発音の能力には関係性が見られ、聞き取りテストで高い正答率をあげた者は、発音テストにおける評価も高い傾向が見られた。また、指導に際して扱った自己モニター型学習を取り入れた課題の評価から、自己モニター力が比較的高いと判断された学習者の発音テストにおける評価が高く、自己モニター力と発音能力にも関係性が見られた。また、発音の評価の高い学習者は、発音に関しての独自の学習方法をもっており、「発音向上意欲」という高い学習意識に根ざした動機をもっていることがうかがえた。さらに、聞き取り能力が非常に高い学習者は、アクセントの聞き取りに関して有効なストラテジーを得ており、さらにそれが、発音における妥当な判断基準となって、発音能力に影響を与えていることがわかった。

そのほかにも、発音能力に関わるものとして、動機の面からは、学習者の目標言語に対する心的距離の問題や、外国語学習に対する学習者個々の学習適性など、さまざまな側面が考えられるだろう。さらに、アクセントの習得に関して時々言われることに、音感の問題もある。日本語のような高低アクセントを捉える上で、音楽的素養が影響しているとする考え方である。この点については、今後さらなる調査が必要な領域であろう。

7. 今後の課題

最後に、本稿は、学習者の発音能力に関して、大きく聞き取り能力との関係、自己モニター能力との関係、学習意識や、学習方略などとの関係という3点にしばった考察であり、12名という限られた日本語学習者を対象とした1ケーススタディーとしての記述的報告である。今後、学習者の発音能力分析にあたっては、さまざまな側面から、より多くのデータを取り、統計的処理等により、数値として実証していくことも必要となろう。さらに、上級学習者に対するインタビューで、十分な答えを得られなかった、自然な韻律文を再生するための発音上のストラテジーについて、さらなる、調査、分析を行う必要がある。また、発音がよいと評価された上級者が行っている学習方法から、発音指導に関して、韻律の視覚化の必要性が再確認されたとともに、モデルを真似るリピート練習などの重要性も示された。今後は、そのリピート練習を一步先に進めたものとしてシャドーイング練習などの新たな音声指導方法の可能性を探っていきたい。

注

1. [モデル発音の聞き取り]を「同定」(教師の繰り返すモデル発音が同じかどうか判定する能力)と「再認」(教師の繰り返す発音が何を発音しているのか認識する能力)、「自分自身の発音の聞き取り」を「モデル自己同定」(教師の繰り返すモデル発音を模倣した自分自身の発音と教師のモデル発音と同じかどうか判定する能力)と「自己再認」(自分自身の発音が意図したとおりの音声として実現しているかどうかを認識する能力)という作業の組み合わせと想定した上での調査である。
2. 上位群に限っては「自己再認」と「発音」の間に有意な相関がみられたとしている。
3. 評価者を日本語教師にしたのは、コメントの記述にあたって、音声に関して、ある程度の知識が必要であるとの考えからである。また、一般の日本人による評価では、どうしても「意思疎通重視」の傾向に終始してしまい、音声的な側面からの具体的な分析が難しいであろうとの考えによる。
4. 句頭のピッチ上昇から次の立て直しに至るまでをいう。(河野他 2004)
5. 音声分析機により東京方言話者の自然な発話のピッチ曲線を抽出し、視覚化したもの。
6. 聞き取りテストにおける e と (う)、発音テストにおける g と e については、差はないと考えてよいだろう。
7. 発音テスト下位の d と c の順位が聞き取りテストで逆になっている点は、問題ではないだろう。

参考文献

- 岡崎敏雄・川口義一・才田いずみ・畠弘巳編(1992)『ケーススタディー日本語教育』桜楓社
- 小河原義朗(1997a)「発音矯正場面における学習者の発音と聴き取りの関係について」『日本語教育』92号 pp83-94
- _____ (1997b)「日本語発音学習における学習者の自己評価」『言語科学論集』第1号 pp27-38
東北大学文学部言語科学専攻
- _____ (1998)「日本語学習における発音学習ストラテジーの有効性の検討」『言語科学論集』第2号 pp1-12 東北大学文学部言語科学専攻
- 小河原義朗・河野俊之(2001)「自己モニターを利用した音声教育教科書の作成」『第3回日本語音声教育方法研究会資料』pp32-33
- 河野俊之・串田真知子・築地伸美・松崎寛共著(2004)『1日10分の発音練習』くろしお出版
- 佐藤友則(2001)「音声指導授業の試み」『第3回日本語音声教育方法研究会資料』pp46-47
- 田中真一・窪園晴夫著(1999)『日本語の発音教室 理論と練習』(窪園晴夫監修)くろしお出版
- 戸田貴子(2001)「日本語音声習得研究の展望」『第二言語としての日本語の習得研究』4号 pp150-168

[資料]「発音テスト内容」(*実際のテストでは、漢字にルビを付したものを使用した)

1. 先週の日曜日、彼の両親とホテルで昼ごはんを食べました。
2. わたしは明日、佐藤さんと飛行機で東京へ行きます。
3. 来月から、スペイン語の学校へ行きます。
4. デパートで、青いネクタイと赤いシャツを買いました。
5. 京都は、きれいでにぎやかな町です。
6. 九州の中村さんが、おいしいお茶を送ってくれました。
7. スミスさんは京都大学の学生です。アメリカの人ですが、フランス語も話します。
8. ベトナム料理の店は、めがね売り場のとなりです。
9. 会場は、名古屋市の県立図書館です。国際センター駅で会いましょう。
10. おとといの日曜日、わたしは新宿の三越デパートへ母の誕生日プレゼントを買いに行きました。1階のかばん売り場で、黒いかばんを買いました。かばん売り場のとなりは、めがね売り場でした。そこで、素敵なめがねケースを見つけたので、それも買うことにしました。